

## 〔学会企画シンポジウムコメント〕

### 霧社事件研究の回顧と展望

春山 明哲

2007年秋、はじめて霧社、埔里、清流（川中島）を訪問し、タクン・ワリス（邱建堂）、ダックス・パワン（郭明正）、鄧相揚、ヤユツ・ナパイ、林至誠（下山誠）、下山操子、高美信などの皆さまにお会いし、霧社事件の現場を実見するとともに、いろいろなお話を伺った<sup>1</sup>。本日、日本台湾学会学術大会のシンポジウムで、タクン・ワリスさん、鄧相揚さん、ヤユツ・ナパイさんと再会でき、特にタクン・ワリスさんから講演いただけることは、大きな喜びである。（以下、敬称略）

#### 〔タクン・ワリス講演を聞いて〕

タクン・ワリスの講演の中で私がかもっとも印象に残ったところは、1973年10月、モーナ・ルーダオの遺体を故郷の霧社に帰還させた時に、「霧社事件についての記憶をたずねて、セデック族の歴史を記録しようと決意した」というところである。なぜならこの同じ1973年という年に、私は戴國輝達の研究会に参加し、霧社事件の共同研究を始めたからである<sup>2</sup>。

また「ガヤ」（「ガガ」）についてたいへん興味深く感じた。霧社でダックス・パワンから「ガヤ」の説明を聞いた時にはイギリスの「不文憲法」を連想したが、この「ガヤ」と霧社事件の関係は今後研究が必要なテーマだろう。

タクン・ワリスがこの会場で私達に「物語る」こと、そのこと自体、大変意義深いことだと考える。本日の講演と報告に共通する点は、「霧社事件にどのように向き合ってきたのか」という問題意識である。これこそ、霧社事件とその歴史が喚起する独自性のひとつなのである。

#### 〔霧社事件研究と台湾原住民族の「証言」について〕

日本における霧社事件に対する研究関心は、霧社事件で「生き残った」台湾原住民及びその関係者との出会いとその「証言」に触発され、また、その「情報」を反映させながら、持続してきた。それと同時に、日本におけるルポルタージュ、研究論文、史料刊行<sup>3</sup>などが、台湾における「証言者」にフィードバックされ、新たな「情報」を引き出してきた。「証言者」として重要な役割を果たしたのはオビン・タダオ<sup>4</sup>、ピホ・ワリス<sup>5</sup>、アウイ・ヘッパハ、林光明などである。タクン・ワリスの講演の中で語られた霧社の戦闘の場面は、アウイ・ヘッパハの『証言霧社事件』<sup>6</sup>に詳しく語られている。

この「証言者」ということに関して、呉密察報告では「戦後の霧社事件研究とは、事件の過程で幸運にも死を免れた台湾原住民に口を開き語らせることであった」と評している。しかし、別の見方もできる。これらの人々は、その動機や立場は同じではないけれども、日本からの訪問者に対する暖かいもてなしを通じて、切実なメッセージを日本人に伝えようとしたのではなかろうか<sup>7</sup>。それは必ずしも客観的な「史実」のみではないかも知れないが、いわば「霧社戦争の戦後

史)における人生と心情との表現のひとつの現われであったとも思われる。台湾原住民の「証言者」は、証言者とのみ見るのではなく、徐々にではあるが「主体的な語り手」になっていった、と見るべきであろう。

霧社事件の研究史は、歴史研究が研究対象との相互作用のもとに進められる、という独特な性質を帯びてきたともいえる<sup>8</sup>。

#### 【霧社事件の歴史叙述について】

北村報告は実に興味深い内容であった。パーラン社のワリス・ブニの悲しみに満ちた「拒否」、その背景をなす「歴史記憶」としての「姉妹ヶ原」(しまいがはら)での多くの青年たちの非業の死、そして、ダックス先生の聴き取り調査の中の「pgluk snaw (男を奪い取る)」という状況、ネズミ捕りの仕掛け、など。「蜂起しなかった」あるいは「味方蕃」の人々についても「その複雑な経験を捉える」ことは霧社事件そのものの歴史ばかりではなく、「台湾原住民族の歴史・文化・社会をどのように描くのかというラディカルな問題提起にほかならない」という、北村の問題提起は重要であろう。

この問題へ導かれる端緒でもあるのが「花岡一郎」(ダックス・ノービン)と「花岡二郎」(ダックス・ナウイ)の問題である。鄧相揚は『抗日霧社事件をめぐる人々』<sup>9</sup>の中で、「霧のなかの花岡コンプレックス」と題する章を設け、彼らとその一族の「歴史的な地位は、いまだ正視されず、評価もされていない。彼らが霧社事件で演じた役割は、霧社の濃い霧のように迷に満ちている。」と書いている。霧社に行った時に「花岡山」(スクレダン山)を眺めたことがある。花岡二郎はオビン・タダオ(花岡初子)の近くに「お墓」が建てられたが、花岡一郎は子孫がないのでいまだに「お墓」がないという(鄧相揚の話による)。

このような状況は、セデックの「ガヤ」から見るとどのような事態なのだろうか。林瑞昌(ロシン・ワタン)、そして高一生(ウオグ・ヤタウユガナ)の人生の軌跡と重ねて、花岡一郎、花岡二郎の問題も考えるべきなのかも知れない。

#### 【霧社事件研究の今後の展望】

今回のシンポジウムの焦点のひとつは「霧社事件の歴史」とはなにかであった。これからは「歴史の中の霧社事件」という視角が重要となるだろう。霧社事件以後の1930年から1945年までの時期、そして1945年以後の時期、その連続性と不連続性をどう捉えるのか。これはより世界史的な枠組みを用意しないと検討が難しいと思われる。とくに「戦後」の「脱植民地化」の過程の中で、すなわち「歴史の中の霧社事件」をどう捉えるか、という意識を明確にする必要があるだろう。

次に、個別研究の深化と総合化が必要になると考えられる。近年の「生命史」をはじめとする個別研究とこれまでの研究蓄積の総合化が期待される。とくに「花岡一郎」、「花岡二郎」、ロシン・ワタン、「非蜂起部落」、「味方蕃」についての考究は今後もっと深められるべきだろう。また、山地の社会経済史といった総合的視点も必要である。例えば、佐久間台湾総督のいわゆる「5か年理蕃事業」の時代、なぜ山地にあれだけ多数の銃器・弾薬・整備技術があったのか、という疑問はまだ解けていない。

最後に、霧社事件の歴史叙述の方法についての感想である。客観的史実の検証、因果関係の分析といった歴史学的な研究方法には限界がある。文学的想像力、芸術的表現による歴史の再構成あるいは形象化が今後も展開されるだろう。その意味では、台湾の映画『海角七号』の魏徳聖監督がどのような映像を製作するのか、期待を持って注目している。

---

## 注

- 1 春山明哲「霧社紀行—研究余聞」『近代日本と台湾—霧社事件・植民地統治政策の研究』（藤原書店、2008年6月）所収。
- 2 春山「台湾近現代史研究会の思い出」、前掲『近代日本と台湾』所収。
- 3 戴國輝編著『台湾霧社蜂起事件—研究と資料』（社会思想社、1981年6月）。春山明哲編・解説『台湾霧社事件軍事関係資料』（不二出版、1992年1月）など。
- 4 中村ふじゑ『オピンの伝言—タイヤルの森をゆるがせた霧社事件』（梨の木舎、2000年10月）。
- 5 ピホ・ワリス（高永清）著、加藤実編訳『霧社緋桜の狂ひ咲き—虐殺事件生き残りの証言』（教文館、1988年1月）。
- 6 アウイ・ヘッパハ著、許介麟編『証言霧社事件—台湾山地人の抗日蜂起』（草風館、1983年5月）。
- 7 レジメでは、台湾原住民族の「証言」者との交流の視点から、霧社事件の研究史を簡単に紹介しているが、本稿では省略した。
- 8 レジメでは、その例証のひとつとして、「高永清から戴國輝宛の手紙」（1982年1月17日付け）を資料として添付したが、本稿では省略した。
- 9 鄧相揚著、下村作次郎監修、魚住悦子訳『抗日霧社事件をめぐる人々』（日本機関紙出版、2001年11月）。鄧・下村・魚住にはこれを含め『抗日霧社事件の歴史』（同、2000年6月）、『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族達』（同、2000年8月）の三部作がある。

